

書評と紹介

大谷禎之介著

『マルクスの アソシエーション論』

— 未来社会は資本主義のなかに見える —

評者：有井 行夫

1 著作の意図と意義

著者大谷禎之介は、MEGAの編集者として、また近年では「マルクスのアソシエーション論」の主唱者としてマルクス経済学界をリードしてきた。本書はソ連崩壊を発端とする20年間に、論争のなかで書き上げた諸論文から成る。大幅に統一化の手をいれ、さらに書き下ろしの1章を加えて、著者は満を持して世におくるのである。

アソシエーションとはなにか。評者の言葉で著者の主張を表現すると、要するにそれは人間的自由の社会的形態化である。この意義においてマルクスの用語法を確認すると、端的に人間諸個人の結合原理の1つとしてアソシエーションがもちいられていることがわかる。しかも、従来の「社会主義」に相当する意義においてである。

ソ連そのものの世界史的意義ならびに社会主義の理念をめぐる、ソ連崩壊の直後から全世界に論争がわきおこった。マルクス主義者のあいだで論争は直接に「マルクス主義の存亡」に関わっており、対立は深刻であった。

しかし今回の諸論争においても明らかになったのは、そもそも各論者においてソ連崩壊という現実的出来事を評価するための理論的な尺度が動揺しているということである。本書は、この事態を目の当たりにして、著者のあてた回答である。マルクスの用例を周到かつ克明に分析して、アソシエーションこそが「社会主義」として理解されていた社会の本来の姿であり、これを理論的尺度にすることによって論争で提起されたほとんどすべての問題は答えることができる。

そのさい著者が真っ向から対立するのは、社会主義の理念は「現存社会主義」という現実を認識対象として前提し、これを理論的に説明することによって得られるとする、いわば実証主義的社会主義論の立場である。それにたいするマルクスの立場はこうだ。資本主義という現実のなかには社会主義の現実性も理念も含まれている。社会主義は資本の自己否定として生まれしてきたし、あえて言うならば、資本の自己否定として現に資本主義の中に存在する。資本の総体的な把握とは社会主義が資本主義の中に否定的に存在している現実をもとらえるのでなければならない。社会主義の概念は、資本主義を把握することによって得られる。実証主義的社会主義論に対立しては徹頭徹尾著者が正しい。

2 著作の構成

著作は3部全11章構成であり、論点は全面的である。章建てを掲げておこう。

序章「現存社会主義」は社会主義か

第I部 アソシエーションとはどういう社会か

第1章 マルクスのアソシエーションとはどういう社会か／第2章「資本主義的生産の否定」

はなぜ「個人的所有の再建」か／第3章「アソシエイトする」とはどういうことか

第II部 ソ連の社会は「社会主義」だったか

第4章 ソ連の社会は国家資本主義だった／

第5章 ソ連の社会は資本主義だった

第III部 アソシエーションをめざして

第6章 アソシエイトした労働とはどのような労働か／第7章 アソシエーションを実現する個人はどのようにして生まれるのか／第8章

資本主義はアソシエーションを懐妊し産みおとす／第9章 自由な諸個人のアソシエーションをめざして／終章 マルクスにとって『資本論』

とはどういうものだったか

とはどういうものだったか

3 社会主義を判定する理論的な尺度

全3部構成はつぎのようである。すなわち、第I部はアソシエーションの概念、第II部ソ連とはいかなる生産様式であるか。第III部は、アソシエーションの現実性（実現性）についてである。内容を確認しよう。

まず、アソシエーションの概念について。マルクスには共産主義社会を指さして、最も基本的かつ包括的である「アソシエーション」のほかに、「共産主義社会」や「社会主義社会」をふくんでいくつかの用語法があるが、内容的には完全に一貫している。それゆえ各用語に共通な本質的要件をしぼることができる。つぎの4つである。①アソシエーションの根本原理として各個人の自由な発展。②そのようなアソシエーションが存立する基礎として、アソシエイトした諸個人による共同的所有、すなわち「個人的所有の再建」。③労働する諸個人は、自己の個人的労働をはじめから社会的労働として支出する。④生産者による生産過程の制御と計画的生産。(①～④)

以上の4つの要件から当然にもつぎの3つがみちびかれる。すなわち、⑤アソシエーション

は商品生産と正反対の生産形態である。つまりこの社会には商品も貨幣もない。⑥この社会には一切の階級もない。⑦国家は死滅している。(⑤～⑦)

さらに、資本主義自身が内発的にアソシエーションを生み出す必然性について3つの集約点がある。すなわち、⑧発展した高度な生産力という物質的前提なしには、資本主義的生産の廃棄はありえない。⑨資本の文明化傾向によって世界市場が形成され、諸国民の全世界的交通と全面的相互依存を進展させ、歴史を世界史に転化させ、労働する個人を世界人に成長させる。このような条件のもとで、来るべき共産主義革命は本質的に世界革命である。⑩変革主体の陶冶。生産過程の担い手として労働する諸個人は生産の必然的要求により自然と社会の認識を自己認識としてふかめ、自己の有機的延長として措定された自然と社会とが資本として自己に対して自立化していることの不条理を自覚するにいたる。(⑧～⑩)

以上が「マルクスの共産主義論の理論的内容の核心」(29頁)である。

4 論点と感想

本書は論争の中から生まれた。それゆえ、体系性は執筆の後景に退き、論点の網羅性が前景化する。そしてその網羅性たるや周到を極めている。ここでは二三の原理的な問題に絞って一定の議論をしたい。論議の位置は、上記の①～⑩に対照すればすぐにわかる。

まず第1には、「ソ連＝資本主義」論を論じる際の道義の問題である。ソ連＝資本主義論はソ連批判の極致である。けれども旧ソ連がロシア資本主義として自己実現して姿を現した今日の時点でこれを主張するのは、後出しジャンケンを出したような気まずさが残る。すでに1920年代より、水準の高いスターリン批判も

ソ連＝資本主義論も十分にあった。それにもかかわらず、なぜ自分は現実を見る目をもたなかったのか。著者は自問して言う。「私自身の痛切な反省を込めて率直に言えば、それは、スターリニズムの汚泥の中に安住していたからである」(39頁)と。

いやしくもマルクス主義の立場に立ってソ連評価に言及しようとする者には、発言資格の道義的な再確認が求められる。すなわち、「自分自身の過去を点検して、自分自身の中にあるスターリニズムを暴き出し、徹底的な自己批判によって自己革新を図る」(同頁)ことである。本書は、著者の自己批判の実践そのものである。

第2には、アソシエーションの概念である。資本主義社会のあとにくる新社会を我々は「社会主義」ないし「共産主義」と呼び、それで十分にマルクス的だと考えてきた。しかしながら実はマルクスが我々の対象と同一の「新社会」を指して「社会主義」とか「共産主義」などと呼ぶのは稀だと著者は言うのである。マルクスが「社会主義」「共産主義」以上に頻用し、新社会の理論的構造をよりの確にあらわしうる用語法があった。これがアソシエーションである。

アソシエーションとはなにか。人間の概念的、社会的、形態的実現である。アソシエーションの理解に必要な限り、著者は自分自身の人間概念を、臆することなく開陳している(83頁など)。人間は普遍的存在(＝類的存在、労働する存在)であり、すぐれて個別と普遍を統一する存在である。個別とは、関わりが自己還帰することによって生き生きとしている人間諸個人の区別そのものである。普遍とは、対象(＝対象としての自分自身、対象としての他の諸個人、対象としての自然という3つの普遍的な対象)に対して自己に対する様態で関わり、有機的統一にもたらしめている根拠、労働の否定的同一

性である。個別(区別)と普遍(同一)の、この媒介的統一運動こそは、労働する諸個人の主体性をシステム原理とする社会システムである(社会的生産有機体)。労働が自己意識を具備した生命の力であることによって人間は普遍と個別の同一を自覚的に措定する存在である。

個別と普遍の自覚的統一という人間に独特の存在様式が産出されたことによって「自由」という存在様式が理解できる。動物一般も個別(自己)と普遍(対象)の統一であるが、その統一は本能的、直接的である。だから動物一般は環境的自然に従属的であり、それ自身が環境的自然の一部である。動物一般には自由の要素がない。それにたいして人間的な労働による統一は自覚的、媒介的である。その媒介性は、労働する諸個人の自己意識を介して全面的であり、労働する諸個人は全自然と全諸個人に対して自己の普遍性として関わる。①労働する諸個人とは可能的に自由な存在であり、②諸個人のアソシエーションとは自由の形態的な実現一般であり、③「自由な」諸個人のアソシエーションとは形態的に完成した自由の実現である。「各個人の自由な発展」を「根本原理」に置いて(27頁)アソシエーションをとらえる著者の根拠であろう。

著者は、概略このようにアソシエーションを理解している。そのさい注意すべきことがもう1つある。普遍と個別の統一として規定関係を見るさいに、著者は徹底して個別極の能動性、主体性にそくしてこれを見ている。「マルクスにとって、共産主義社会を生み出す主体が諸個人であり、また生みだされたこの社会における主体がどこまでも諸個人であって、それが諸個人のアソシエーションにほかならなかった」(88頁)。労働する諸個人こそが根源的な主体であり、自己の諸前提たる社会的諸関係を自己の活動の結果として措定しているのである。だ

から批判的認識とは、眼前の直接的な関係について労働の媒介諸関係として、すなわち生産諸関係の媒介としてとらえることである。

第3には、社会関係の批判的把握の原理としてのsich verhaltenについてである。「労働する諸個人は全自然と全諸個人に対して自己の普遍性として（に対する様態で：これは著者独特の表現であるが、本稿はすでにこれに従っている）関わる」と評者はのべた。この「言い回し」は、一般的には、「SはOに対してNに対する様態で関わる（S verhält sich zu O als N.）である」。「マルクスにあって決定的に重要なのは」、この「言い回し」である。このSの主体的行為は、Sが、OはNであることを認める、承認するという含んでいる。その結果として、OはSに対してはNという意味を持ち、Nとして通用する（geltenする）ことになる」（241頁）。

著者は、マルクス読解において新たなエレメント（独特の問題設定を発生させるフィールド）を開いたのである。補論2のsich verhalten論である。sich verhaltenについて「舞台回し」、「論理的装置」、「論理的武器」、「言い回し」などと言い換えて、認識主観の側の認識ツールのごとき響きを与えていることから、たしかに著者はこれが社会関係の唯物論的把握だとは認めないかもしれない。しかしsich verhaltenは社会システムを媒介している関係性の基本単位であり、存在様式としての社会関係の表現である。そして対象の対象に対する対象的な関わりをとらえること（「対象的な本質は対象的に作用する」『経哲』）、が存在に即すことなのである。

たとえば最も単純な社会関係は2項の相互関係のように見える。しかしこの2項のあいだにそのような相互関係が存在しているかどうか。2項関係と見えたものが実は「観察者の立場」に立つ認識者の関心にもとづく意識の力による関わりであって、存在する関わりではない。存

在する「関係」は不断に作用している対象的な力による。意識の力によってなりたつ直接的な社会諸関係について、実在する力の媒介として再把握することである。社会関係の唯物論的存在様式は、所与の2項関係において、1項の能動性項によって再限定される。「観察者の立場」とは、媒介環をスキップしてしまうこと。その結果生じた媒介環の空白を存在する1項の能動性によって媒介し直すのではなく、意識の能動性によって直接的に2項を接合してしまう。

だから最も単純な社会関係は、能動的1項による一方的な関わりである。価値形態論における「最も簡単な価値表現」はその典型例である。S（商品A、能動項）はO（商品B、受動項）に対してN（Aに対する直接的交換可能性の形態、等価形態）に対する様態で関わる。

著者は、特に『要綱』諸形態論と『資本論』価値形態論に多い豊富な文例を徹底的に分析し、帰納的に中心的問題に接近している。

さて、大谷は「唯物論的關係規定の一般的定式」の発見という大きな仕事をしたことになる。私も価値形態論の「価値関係」について、これが「関係」という存在様式の価値形態論における特殊の形態でなく、社会関係の一般的形態だということは解っていた。しかしそれ以上に展開することはなかった（拙著『マルクスの社会システム理論』1987年、16-21頁）。アソシエーション論としては、移行過程の諸条件について所有論にも言及しつつ論じたいところであるが、ここで紙幅が尽きた。アソシエーションの原理的構造に論点を絞って論じた次第である。

（大谷禎之介著『マルクスのアソシエーション論—未来社会は資本主義のなかに見えている』桜井書店、2011年9月刊、430頁、定価5,200円＋税）

（ありい・ゆきお 駒澤大学経済学部教授）